舟戸遺跡　秋葉区古津

舟戸遺跡は新津丘陵西側の裾部から広がる平坦面にあり、旧大通川の自然堤防上の微高地に立地している。範囲は、東西約五〇〇メートル、南北約六〇〇メートルと広く、面積は二四万平方メートルと推定される。古津駅の西側に位置し、現在は大部分が住宅地となっているが、遺跡の西側は水田と畑が広がっている。

図26　遺跡の位置
5万分1地形図「新津」

平成五（一九九三）年、新津市教育委員会が建設会社の社屋建設に伴い四七〇平方メートルを発掘調査し、古墳時代中ごろ（五世紀ごろ）の生活の跡が見つかった。竪穴住居跡が四棟見つかったほか、土器を捨てたごみ穴や井戸、柱や杭の跡なども確認されている。また、当時の人々が使っていた土器も数多く出土した。煮炊きに使った甕や、液体を入れた壺、食べ物を盛ったお椀や高坏（脚が付いた器）などが見つかっている。

図27　舟戸遺跡遠景

竪穴住居跡のうちほぼ全体が発掘された一棟（図二九）は、一辺約七メートルの正方形で、四本の柱で屋根を支えていたと考えられる。この竪穴住居跡の中央で、灰と炭が広がっているのが確認された。住居の床で直接火を焚いた「地床炉」の跡であると思われる。また、北壁の床の一部分が外側に張り出しており、そこから焼け

た土が集中して見つかっている。これも火を使った跡と考えられ、ここに「カマド」がつくられていた可能性がある。「カマド」は五世紀に導入され始めた新しい文化である。「地床炉」から「カマド」への変化は、単に炊事の場が変わったということではなく、使われる道具や住居の中の使い方の変化など、生活様式そのものが大きく変わったことを示している。これが「カマド」だとすれば、舟戸遺跡は時代の転換期を表しているといえよう。

発掘面積が狭いにもかかわらず、出土した土器の量が破片も含めて三万点以上であることから、一時的な集落ではなく、一定期間人々が定住した集落であったと考えられる。舟戸遺跡の南東約一キロメートルには、新潟県最大規模の古津八幡山古墳（一六ページ）がある。また、舟戸遺跡の東側には、塩辛遺跡（旧称、古津駅前遺跡）・高矢Ｃ遺跡（旧、古津諏訪社遺跡を含む一帯）など古墳時代の遺跡が隣接しており、この付近には、古墳時代に多くの人々が住んでいたと考えられる。古津八幡山古墳を造った豪族と、舟戸遺跡周辺に住んでいた人々との関係が注目される。

図28　古墳時代中期の土師器

図29　竪穴住居跡　上に張り出しが見える